

## 農作物技術情報 第2号 畑作物

発行日 平成23年 4月26日  
 発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
 編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
 パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

## 小麦

- ◆ ほ場の排水口や明きよの点検補修を行いましょ。
- ◆ 減数分裂期以降の追肥は、品種、地力を考慮し、生育量に応じて行いましょ。
- ◆ 赤かび病の防除は、開花始期～盛期に必ず行いましょ。

## 1 小麦

## ■ 生育状況

越冬前の生育は平年をやや下回っており、越冬後も根雪期間が長かったことや融雪後にもたびたび降雪がみられるなど、気温の低い日が多かったことから、小麦の生育は抑制気味です。生育ステージは平年並みからやや遅れています。

雪腐病や萎縮病類の発生状況等によりほ場間差はありますが、徐々に融雪期追肥の効果が現れ、回復の兆しがみられます。

## ■ 小麦病害の発生状況

雪腐病は、県北部でわずかに発生が見られた程度で、全県では平年より少ない発生となっています。縮萎縮・萎縮病についても、平年より少ない発生となっています。

## ■ 今後の管理

## (1) 排水対策

ほ場の排水口や明きよの点検補修を行い、スムーズに排水できるようにしましょう。排水口や明きよが埋まっていないか、ごみが詰まっていないか確認し、確実に排水できるようにしましょう。

## (2) 後期追肥の実施

減数分裂期以降の窒素追肥で、子実の充実とタンパク質含量の向上を図りましょう。

ただし、生育量や品種によって追肥の有無、時期、量が決まります。特にナンブコムギは、品質評価基準(ランク区分)に係る用途区分について、全て日本麺用からパン・中華麺用に統一されたことから、タンパク質含量の向上がより一層重要となります。

追肥の対応は、減数分裂期に生育栄養診断を行い、その結果に基づいて追肥量を判断しますが(表1)、地力を考慮し、圃場にあわせた判断が必要となります。無理に追肥を行って、倒伏や、生育にバラツキが出ないようにしましょう。また、地域によってタンパク質含量に差がみられますので、過去の実績を参考に追肥量を調節してください。

表1 減数分裂期における生育目標値(上限値)と追肥対応

	品種 診断項目・指標	ナンブコムギ (目標値)	ゆきちから (上限値)
減分期追肥	草丈(cm)	55~65	55
	有効莖数(本/m <sup>2</sup> )	450~550*	500*
	葉色(n-1葉のSPAD値)	36~44*	47
追肥対応	目標値(上限値)を超えるとき	追肥しない	穂揃期に窒素成分で2kg/10a
	目標値(上限値)の範囲内のとき	減数分裂期に窒素成分で2kg/10a	穂揃期に窒素成分で4kg/10a

注) \*印は、追肥対応のための主要な診断項目。減数分裂期は、約半分の有効莖の止葉の葉耳が出た時期を目安とする。この時期は出穂期の概ね10日前となる。

(3) 赤かび病の防除

開花始期～盛期に必ず薬剤防除を行います。2回目の防除は1回目の防除から7～10日後に行います。曇雨天が続く場合には、さらに追加防除が必要となります。

小麦の開花は出穂してから1週間程度後となりますが、気温によって開花までの時間が長くなったり、短くなったりします。出穂を確認したら、ほ場の観察をこまめに行い、適期に薬剤防除を行いましょう。また、罹病穂の抜き取りは穂が緑色のうちに行いましょう。

表2 赤かび抵抗性に応じた小麦奨励品種別の防除適期

品種名	赤かび抵抗性	防除適期		
		開花期 (1回目散布)	1回目散布の 7～10日後	2回目散布の 7～10日後
ナンブコムギ	やや強	必須	曇雨天が続く場合 追加散布	—
ゆきちから ネバリゴシ コユキコムギ	中	必須	必須	曇雨天が続く場合追加散布

2 大豆

(1) 圃場の選定・連作防止

ブロックローテーションを導入する場合は、大豆作に不向きな圃場は計画から除外するなど、圃場の選定から吟味しましょう。

(2) 連作防止

連作による病害虫の蔓延、地力の低下、雑草の多発などが問題となっています。長期的な展望を持って、計画的な土地利用、作付けをすすめましょう。

マメシクイガは、大豆の連作で密度が高まり、水田に戻すことで被害を回避できることが知られています。昨年被害が目立ったほ場は、大豆の作付を見送るなどの対策が有効です。

(3) 排水対策

大豆は初期の湿害が収穫時にまで影響する作物です。ほ場周囲の排水溝やほ場内の明渠、補助暗きょ等の対策を講じ、良好な初期生育を促しましょう。

(4) 播種適期

播種期は、早限を出芽時に晩霜の心配のない頃、晩限を霜による強制登熟で未熟粒が多発する心配のない頃に設定します。概ね、県北部では5月中下旬、県中部では5月中旬から6月上旬、県南部では6月上旬が播種適期となります。

(5) 適正な栽植密度の確保

畦間は70cm程度を標準とし、中耕培土等の中間管理や収穫に用いる機械の幅に応じて作業が効率的に行えるように設定します。品種ごとに好適な栽植密度とするためには、株間の調整が必要です。

表3 普通大豆の品種別栽植密度と播種量

項目	ユキホマレ	ナンブシロメ	リュウホウ	スズカリ	青丸くん
栽植密度(本/10a)	2万～3万	1万～1万2千	7千～1万5千	1万～1万2千	1万～1万2千
畦間×株間(cm)*	70×14～9 30×30～22	70×30～24	70×40～20	70×30～24	70×30～24
播種量(kg/10a)	6～9	2.5～3	2.5～5	3～3.5	2.5～3

\*畦間を70cm、1株2本立てとした場合を示した。

「ユキホマレ」の麦後栽培では畦間30cm前後の狭畦密植とする。

「リュウホウ」は、播種期により栽植密度を調整する(晩播ほど密植とする)。

春の農作業安全月間実施中！

[ 4月15日  
～6月15日 ]

農作業 無事故でつなぐ 明るい未来

次号は5月26日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。